を梅の露といふた。額谷屋は數代連綿したが廢藩の頃その地を去つた。

ヌカダニヤシヨウジ　額谷屋小路　金澤の舊町名。河南町(今片町)なる額谷屋の横小路をいうた。

ヌカニシジンジヤ　額西神社　石川郡額乙丸に在り、延喜式神名帳にはヌカノニシと訓じ、式内等舊社記には『額西神社。式内一座。額乙丸村鎮座。稱=藪田明神一也。舊傳云。東西兩神社。古來鄕内七村之惣社也。』と見える。藩政末期では金澤の當山派山伏寶光寺がその別當で、藥師如來を安置してあつた。

ヌカヒガシジンジヤ　額東神社　石川郡額谷に在り、延喜式神名帳にはヌカノヒガシと訓ずる。古へ同村の東なる額山の麓に鎮座したが、富樫氏亡滅の後社殿廢絶し、今の村中に遷して再營したといひ、式内等舊社記にも『額東神社。式内一座。大額御額谷鎮座。祭神猿田彦神。中古社地移轉。今稱=額谷宮=。』と見える。藩政末期には金澤の當山流山伏寶光寺之を兼帶し、十一面觀音と稱した。

ヌカミ　額見　江沼郡潟回に屬する部落。茇憩紀聞に、この村に瀧川左門の居蹟があつて、堀形・小土居などを存するとある。

ヌカミシヤ　額見社　江沼郡額見に鎮座する。白山・神明を勸請するが故に二社とも號する。

ヌカモチイヘ　額用家　參考太平記金勝院本に、延元三年七月越後勢の越前に赴く條に、『富樫介高家は在京したりけれども、一族に額齋藤四郎用家高松濱にて懸合、散々に戰ひけれども叶はず、那谷城へ引籠る』とあり、富樫譜には、富樫介家直の弟景家、その子用家、その子氏家となつてゐる。白山社藏延文元年二月十六日上林鄕寄進狀に、前對馬守用家とあるも同人であらう。

ヌクヰ　温井　鹿島郡三階良川保に屬する部落。元祿の鄕村名義抄に、邑名はこの地に温井氏が居住したに因るとするが、越登賀三州志には館迹詳かでないとし、又能登志徵には、この村は温井氏の邸址に立つたもので、温井氏がこゝから起つたのでないと記する。今案ずるに温井氏の城址は鳳至郡別所谷のうち帶壁(タテカベ)にあるから、鹿島郡温井はその稱呼を同じくするのみで、何の關係もないのであるまいか。

ヌクヰウヂ　温井氏　能登畠山氏の老臣。その祖は桃井直常の子義綱に起るといふが、爾後の系統は明らかでない。その越登賀三州志に載せられるものを圖示すると左の如くになるが、景松・景國・景家・景長・景貞・景員等の名は、當時の文書記錄等に一も發見し得ぬ。恐らくは太平記理藩抄に因つて誤られたものであらう。諸系圖七十五所收の温井氏系圖も之に類するが、稍異なる所がある。今文書・棟札等によつて見るに、略左揭今按の如くであらうと思はれる。この外尙温井氏を冒す者の名は多く見えるが、その關係明白でない。温井氏本宗の居館は、鳳至郡別所谷のうち帶壁(カベ)に在つた。

○越登賀三州志

○諸系圖

○今　按

ヌクヰカゲタカ　温井景隆　通稱兵庫助・備中守。總貞の子か、又は總貞の孫で續宗の子か明らかでない。弘治二年總貞の弑せられた後、弟三宅備後長盛と共に加賀に逃れ、翌三年一向一揆の援を得て能登に侵入し、羽咋郡押水から志雄に至る間を占領した。永祿二年景隆等再び兵を動かしたが、畠山義綱は長續連をして佛木に邀擊せしめた爲敗れて押水に退き、三年また鹿島郡荒山・石動山附近に出張して續連に追はれた。十一年景隆・長盛二人、長綱連に憑つて七尾に歸り、舊主に仕へんことを請ひ、綱連爲に勸解して之を宥された。天正二年七月遊佐續光のその主義隆を鴆殺した時にも、景隆はその密謀に與つて居た。五年上杉謙信の七尾城を攻めた時、之を久しくして陷落せしめるを得なかつたので、謙信乃ち九月遊佐續光を誘うて内應せしめ、續光は又景隆・長盛をして志を一にせしめた。是を以て戰後景隆等は越後に赴いて謙信に謁したが、謙信は之を與力の士たらしめ、采地を加恩して能登に歸らしめた。然るに景隆等は、謙信の歿後漸く擡頭し、七年七尾城の越將鰺坂長實の諒解を得て、甲山城主平子和泉・轡田肥後、正院城主長景連を討伐したが、和泉と肥後は途に死し、景連は越後に遁れた。穴水城主長澤光國は、景隆等が狼戾の志あることを長實に忠告したが、長實は之を容れることを得なかつたから、光國は手兵を率ゐて景隆等を石動山に走らしめたが、不幸にして瀧坂の戰に討死し、次いで景隆等は長實を逐うて七尾城を奪うた。しかも越中に居た長連龍がその妨害をなさんことを憂へ、誓書を送つて和親を求めたが、連龍は之を容れず、七年冬羽咋郡敷波に侵入したので、景隆等は本鄕鉢伏山砦に八代越中・温井筑前(景隆從弟)、金丸佛性寺砦に八代肥後・古浦屋新助、東馬場砦に山莊監物、小竹砦に成田武安等を置いて防備に當らしめた。八年連龍は一たび加賀に赴き、三月又福水に入つたので、閏三月景隆は温井筑前・八代越中等をして之を襲はしめたが、却つて飯山に破られ、本鄕鉢伏山砦をも奪はれた。景隆乃ち敵し難きを思ひ、連龍に憑つて罪を織田信長に謝したが、連龍は之を介すると共に、父兄の仇たる景隆等を得て甘心せんことを請うたので、和議遂に成立しなかつた。是を以て景隆は五月五日及び六月九日の二次に連龍に戰を挑んだが、大敗して佛性寺・東馬場・小竹・金丸等の砦を奪はれた。かくて景隆等は各方面に利を失うた爲、三宅長盛をして安土に赴き、七尾城を開いて降伏せんことを請ひ、その許容する所となつた。九年三月信長は、菅屋長頼・福富行清・前田利家を能登に遣はし、その國政を掌らしめ、景隆と長盛は七尾を去つて石動山に入り、その生命を保たんことを求めたが、遊佐續光一族の長連龍に殺されるに及び、景隆等も亦免